

早稲田文学震災チャリティと本書について

本書に取められているのは、東日本震災を目の当たりにした二〇一一年三月一三日に立ち上げられた、早稲田文学をベースとしたチャリティ・プログラムのために書きおろされた短篇と、それに付随して行われたふたつの対談・座談、そして震災以後に刊行された雑誌「早稲田文学」とフリーペーパー「WB」に掲載された数本の論考およびエッセイである。

チャリティ・プログラムは、主として以下の四形態で行われた。(1)賛同した書き手によるサイン入り刊行物の販売、(2)書き下ろし作品のPDFファイルでの販売と、販売されたファイルの転送による寄付呼びかけ、(3)各作品の英語訳および一部作品の中国語・韓国語訳PDFファイルの無償公開による寄付呼びかけ、(4)チャリティ・オークション。

書き下ろし作品のプログラムは、三月末の古川日出男「プーラが戻る」に始まって、九月末の重松清「また次の春へ——盂蘭盆会」まで、半年間で一五作品が公開されている。どの書き手、どの作品も、やすやすと書かれたものではなく、それぞれの躊躇と真摯さが滲んでいることは言うまでもない。一部の作品は、雑誌「早稲田文学④」や「WB」、それに後述の辛島デイヴィッドが手がけたアンソロジー「March Was Made of Yarn」(米 Vintage 社／英 Harvill Secker 社刊 日本語版は『それでも三月は、また』として講談社より刊行)にすでに再録も行われている。

並行して、チャリティの参加者でもある青山南と都甲幸治、それに都甲の紹介した辛島デイヴィッドが中心となるかたちで翻訳者をコーディネートし、英語訳のプロジェクトが立ち上げられ、マイケル・エメリックを筆頭に、日本の現代文学の翻訳を手がけている若い翻訳者たちが、全作品を読んだうえでそれぞれの適

すると思われる作品を選び、短い期間での困難な仕事に挑んでくれた。古川の「プーラが戻る」にかんしては震災直後の日本のニュアンスを残すために、また木下古栗の「カンブリア宮殿爆破計画」は作風の特異さを表すために、日本語を母語とする片桐聡が翻訳にあたって（すべての英語訳作品の訳文のチェックと校閲は、辛島によって手がけられた）。同様に、中国語訳については泉京鹿が翻訳者のコーディネイトと訳文のチェックを、韓国語訳は吉川風が訳文のチェックを行っている。

多忙を縫って多数のサイン本を作ってくれた東浩紀、川上未映子、蓮實重彦をはじめとする「早稲田文学」の執筆者はもちろん、公開のサイン会に集まった青木淳悟、朝吹真理子、阿部和重、中村文則、中森明夫、松田青子、村田沙耶香、チャリティ・オークションに貴重な原画や下書きを提供してくれた玉川重機、震災に向き合うことと作品をつくることという創作者たちの直面した困難を、被災地の風景にどうしようもない美を見いだした写真集『ATOKATA』から提供した表紙写真で包んでくれた篠山紀信など、すべての参加者にこの場を借りて感謝したい。（市川真人）

*1 本書・日本語側の二六五頁に参加者・協力者の一覧がある。

*2 原則として公開日から一年間を限度に、購入者はファイルを自由に転送できる。受け取った者には、作品末尾に記載された日本赤十字社をはじめとする義捐金窓口への任意の額の寄付が勧められている。

*3 外国語版も、公開日から一定の期間、自由な転送が許諾されている。その場合の寄付先は、各国それぞれの赤字や、世界各地の災害・事故に対する義捐金窓口となる。

*4 Yahoo! JAPANが主催した「東日本大震災チャリティオークション」http://topic.auctions.yahoo.co.jp/danry/2011sanjukuokl_eq/への参加のあたりで行われた。

*5 翻訳プロジェクトの全体については、辛島による「A Word on the Translations」（本書・翻訳側のP178）を参照。